



目標は 上求菩提下化衆生

薪流会総裁 雪丸令敏

七月発行予定の会報に寄稿を依頼され、書き始めたのが三月末の、正に鶯が鳴き桜花爛漫の折にて、例年ならば花見や酒に浮かれるところだが、本年は思いがけないコロナウィルスで世界中が大騒ぎとなり、各国間の交易も乱れ、国内に於いてもオリンピック延期など、あらゆる制約が出来、友人同士の対話すら尐ならぬ状態であり、花気違ひ、鳥気違いと呼ばれる不肖も大きな打撃を受けて居る次第であります。街頭で出逢う人々は皆、マスクを着けており、まるで悪魔を見る様です。此の会報が刊行される頃は、梅雨も上がり、青葉が日に映え、山には杜鵑、彼方は入道雲が湧き、海水浴など楽しむ時期ではないかと存じますが、本年はさてどうなることやら、先行きの

読めない状態であります。

然し乍ら、我々薪流会員の目標は、飽く迄も上求菩提下化衆生であります。此の様な時にこそ、己事究明に励み、為人度生と働くべきではないかと存じます。其の為には、御生前に大隠窟老漢が口癖の様に言つて居られた様に、先ず己事究明をしつかりとやり、大死一番、絶後再蘇生して、正念相続することが第一ではないかと存じます。此が出来れば、日常の一言一句一挙一動が皆、大道となり、特に構えなくとも、下化衆生、即ち為人度生は自然に行われるのではないかと存じます。そうなると結局は、上求下化一如となつて、自在に働くのであります。其の上に我が薪流会員は、いざ災害などが起こると、速急にボランティア福祉と活躍されるので、文字どおり活発々地の、上求下化一如の働きと讃えるべきでしよう。

〒616-8035 京都市右京区花園妙心寺町53 養徳院内 横江 桃國	本 部
〒509-0301 岐阜県加茂郡川辺町下麻生1998 大雄寺内 大野 祥雲	発 行
〒430-0838 静岡県浜松市南区鼠野町48 龍泉寺内 薬師寺 良晋	編 集
〒505-0021 岐阜県美濃加茂市森山町1-1-34 有限公司 永田印刷	薪流会ホームページ http://www.shinryukai.jp/
前總裁 大祥忌並びに総会報告 遺稿「起信会のこと」 「スパール復興報告」 「スバル復興報告」 「スバル復興報告」	印 刷
托鉢報告 決算報告 色紙案内・編集後記	講師 佐々木 開 大塚 文俊 小栗 勝 ゲルン・ビル・ハド 薬師寺 良晋

研修会

仏教の戒律

期日 令和元年五月二十日
於 名古屋 メルバルク

花園大学文学部仏教学科教授

佐々木 閑

佐々木でございます。今日は「戒律」について話を聞いて貰いたいということでございましたので、テーマは「仏教の戒律」ということで、資料を持ってまいりました。

アシヨーカ王碑文

佛教の基本的な成り立ちからお話しを申し上げます。仏教という宗教を考える場合には、まず何を置いても大事なことは、「なぜ佛教ができたのか」という、仏教ができるならなかつた必然的な動機というのがどうしても必要なですが、これがほとんど語られることがないんですね。いろんなお話を聞いても、お釈迦様が菩提樹の下に座つたら悟つちゃつたみたいな話で、別にそのときは悟らなくていいのに、たまたま悟つたんです、みたいなことなの

ですが、それは違うので、あの時代、あの場所で釈迦が悟らなければならなかつたという、仏教が生まれなければならなかつた理由と理解しないと、仏教という宗教の本質は全く理解できないはずなのです。そういう意味では、一般的に言われる仏教興起の説明は、かなり偏つた足らない部分が多いと思います。

今から二五〇〇年前、これはもうご存じのとおりですね。しかし、お釈迦様が二五〇〇年前という確証はどこにもありません。インドの歴史の中で唯一、古代の歴史の中で唯一、年代が決定できる事蹟は一つしかないのです。それは何かと言いますと、アシヨーカ王が残した『アシヨーカ王碑文』とい

う石に彫つた記録であります。こ

れが一八三七年まで解読できませんでした。王碑文が読めるようになりました。

そこで何が書いてあつたか。いろいろなことが書いてありましたけれども、一番大事なのはアシヨー

カ王が「私がいま治めている印度の方には、こういう国があつて、こういう王様が治めている」という自分の同時代の人の名前を五人挙げています。その五人というのは皆、ギリシャやエジプトの王様なのです。

インドという国は年代を書き残さない国なので、何がいつあつたのか全く分からぬのですが、ギリシャとかエジプトは年代を書き

残す国なのです。中国と一緒に何が起こつたということを全部記録します。それが紀元前三世紀の中頃、つまり、紀元前二五〇年を中心とした数十年、と決定できます。これが古代インドのあらゆる歴史の中で、仏教だけではあ

バラモン教

仏教が生まれる時代のことを簡単に申しますと、宗教のない文化世界というものはどこにもありませんから、お釈迦様がお生まれになる前のインド周辺にもバラモン教と呼ばれる宗教がございました。この宗教の本質は何かと言います

と、多神教であります。たくさん の神様が、それぞれの自然現象を 司っているのだというわけで、太 阳の神、月の神、雷の神、いろいろな神様がいて、その神様が全体 として宇宙を司っているという形 になるわけです。

この神様は、われわれに良いこ とをしてくれます。お布施をあげ て拝むと良いことをしてくれる。 その代わり、粗末に扱うと害を与 えるということで、日本の神道と 同じような感じの宗教です。

ただし、日本の神道と一つだけ 決定的に違うところがある。それ は何かと言うと、神様にお布施を してお願いをしますが、その加護 を頂けるのは特定の血筋の人だけ なのです。ある家系の名字、あるいは 血の繋がりのある人だけが、 神様との間にその契約関係を結ぶ ことができて、その血筋から外れ たところに生まれた人たちは、神 様とは縁なく暮らさなければなら ない。つまり、神様から何の恩恵 も得られないわけです。

そうしますと、その人たちこそ の神様と繋がっている人たちにお 願いして、神様との仲介役をして 貰らなくてはいけないことにな ります。逆に言うと、その上の人 たちを怒らせるようなことをする

と、その上の人たちが神様を使つ て、自分たちに害を与える恐れも ある。というわけで、神と繋がつ た人たちに対しては、誰もが皆、 頭が上がらないという状態にな る。神との仲介役、祭祀をする人 たちがバラモン階級です。

神と繋がりのない下の階級は、 世俗の中で金があるとか、一般人 だとか、あるいは人に使われてい る奴隸とかいうことで、これが いうのは非常に人手がいる。一つ 一つ人が摘まなくてはいけない。 ところが、アメリカにいる白人を 総動員しても、とてもそれにはか なわない。そこでアフリカから船 に積んで買ってきました。無 料の労働力として盗んできたわけ です。それがアメリカ社会の中で 働き始めて、結局、労働者の黒人 とそれを使う白人、これは社会が がその人の人生を決める」という

ことになるわけです。つまり、「生 まれ血筋によつて、既にその人の 人生は決まつていて」ということ になるわけです。それが仏教が生 まれる前のバラモン教の世界なの です。

何が大事かと言いますと、この カースト制度を決めているのは、 社会制度ではなく宗教なのだとい うことです。

世の中には様々な差別がありま す。例えばアメリカの黒人差別。

これは宗教と関係ありません。ア

メリカが綿などの栽培で世界の一 流国になろうとしたときに、綿と いうのは非常に人手がいる。一つ 一つ人が摘まなくてはいけない。 ところが、アメリカにいる白人を 総動員しても、とてもそれにはか なわない。そこでアフリカから船 に積んで買ってきました。無 料の労働力として盗んできたわけ です。それがアメリカ社会の中で 働き始めて、結局、労働者の黒人 とそれを使う白人、これは社会が

ここにキリスト教の教えは何も関係 していません。

アメリカの黒人差別をなくすに はどうしたらいいか。キリスト教 は関係ありませんので、社会制度 を変えればいいわけです。つまり 法律とか、あるいは人々のもの の考え方とか、そういうものを変え ると黒人差別は次第になくなつて いつて、とうとうオバマ大統領が 出て来る。こういう状態になるわ けです。



カーストはそれは絶対に無理です。カーストはそれをつくったベースがバラモン教という宗教概念にあるわけなので、カーストをなくそうと思ったら、バラモン教そのものをなくすしかありません。別の宗教を取り換えるなくてはいけないことになります。なので、その時代のカーストを中心とした世界観に反対をする人たちが、なんとかカースト制度をなくして差別のない社会をつくりたいと願うならば、その人は社会改革者ではなく、宗教改革者にならなくてはいけない。新しい宗教をつくる人にならなくてはいけないわけです。ここに釈迦という人が出生した意味が出て来るわけです。

仏教の basic 理念

釈迦はそのバラモン教に真っ向から対立する新しい宗教概念を生み出しました。その基本は何かと言ふと、「生まれたときは全て平等だ」という考え方。「カーストは絶対認めない」というのが仏教になるわけで、沙門という言葉自

は、人は生まれたときは全て平等の人間をなくすしかありません。別の人間をやつたことは、生まれた後に自分がやつたこと。つまり自分の努力が人の幸せのベースになる。もつと言ふと、人が何をしたかによって、その人の幸せは決まる。努力が一番大事だという新しい宗教世界をつくりたわけです。

この「努力をする」という言葉を、インド語では「シユラマナ」と言います。これが後に漢文に翻訳されるときに、音が移されまして、シユラマナがシャマナになります。沙門というと日本ではお坊さんのことを指すのですけれども、当たり前なので、お坊さんは沙門なのです。その代わり努力しなければ沙門ではないですね。努力しなければ、それはエセ沙門ということになります。

釈迦はそのバラモン教に真っ向から対立する新しい宗教概念を生み出しました。その基本は何かと言ふと、「生まれたときは全て平等だ」と考えるのが仏教の基本的な世界観なのです。

お釈迦様が考えたのは、バラモンだのクシヤトリヤなどと言つて、実体のないような血筋、家系でその人の上下を決めているのは全くの錯覚なのであって、本当のところはどうなのかというと、われわれが幸せだと思っている、その幸運がすべて泡沫の嘘だと言つているのです。実際に本当の人間

の basic 理念になるわけです。

カーストを認めないとすること

は、人は生まれたときは全て平等の人間ばかりですが、それは皆

あつたらしいのですが、それは皆、印度語なのですね。

お釈迦様の時代には、仏教以外にも反バラモン教の宗教が沢山

ありますから、したがって、そ

の人が幸・不幸になる基準は何か

と言いますと、生まれではなくて、生まれた後に自分がやつたこ

と。つまり自分の努力が人の幸せ

のベースになる。もつと言ふと、

人が何をしたかによって、その人

の幸運は決まる。努力が一番大事

だという新しい宗教世界をつくりたわけです。

この「努力をする」という言葉

を、インド語では「シユラマナ」と言います。これが後に漢文に翻訳されるときに、音が移されまして、シユラマナがシャマナになります。沙門というと日本ではお坊さんのことを指すのですけれども、当たり前のことで、お坊さんは沙門なのです。その代わり努力しなければ沙門ではないですね。努力しなければ、それはエセ沙門ということになります。

お釈迦様が考えたのは、バラモ

ンだのクシヤトリヤなどと言つて、実体のないような血筋、家系でその人の上下を決めているのは全くの錯覚なのであって、本当のところはどうなのかというと、われわれが幸せだと思っている、その幸運がすべて泡沫の嘘だと言つているのです。実際に本当の人間

を見ていると、全員が最低ラインの不幸なところで苦しみ悶えている人間ばかりだと。

正しい生き方をすれば必ずや死

んだ後に、最後の審判において、神によつて最高に幸せな場所に連れて行つてもらえる、「救われる」

という希望で生きています。これ

は「一切皆楽」の宗教です。

救われない自分が王子様の姿を

して、キンキラキンの生活を送つて、いくら贅沢な生活をしても、私は最低の不幸にいるということ

が分かつてしまつたら、そんなものは何の意味もないわけです。

生きるということの別の言い方は、年をとつて病気になつて死ぬといふ、この運命を生きるということを佛教は言つてゐるわけです。

生きるということの別の言い方は、年をとつて病気になつて死ぬといふ、この運命を生きるということを佛教は言つてゐるわけです。

我々が年を取つて病気になつて死ぬといふこの绝望感の中から何とかこれを克服して生きる道があるかと考えたとき、釈迦は「老と病と死」そのものを消そぐと思つ



こつてくるのであり、その一番大事を探つてみると、「自己を中心としてすべてを見ていく」という世界が苦しみの基になる」、こう言われています。

こうして仏教の教えの基本の方針は何かといふと、「自分中心」あるいは「自分のもの」という所欲などなど、すべてが私を中心にならでいるこの世界を崩せ、と動いています。

全てのものの中はどこを見ても、実は自分中心になつて何もないんだということも、釈迦はみんなに知つてもらいたいので、それを「諸法無我」と言つたというのです。全てのものをたくさん手に入れるのが幸せだと考へているのは大間違いで、実はすべてのもの安樂な状態であるということを知つてもらわなければいけない。

全ての世の中のものは、いつまでも今ある通りにそのまま続いているのではない、時間とともに必ず崩壊していくのだ、これを釈迦が最終的に考へたのは、我々の苦しみは心の内側から起

迦は「諸行無常」と言つたのです。本来、自分を中心にものを考えるような本能を持つて生きているわれわれが、その自分の染み付いたものの見方を、自分の努力によつて少しずつ調整していく、自分中心に見ないような人格、世界觀を作つていかなければならぬ。それが仏教の修行なのです。

お釈迦様自身がまず最初にその修行をやつてみて、それが菩提樹の下で最終的に完成した。こうしてブツダになつたわけです。

お釈迦様自身の心の苦しみはもう既に消えたのだから、自分にとつては人生が完成したわけです。残りの寿命はどれだけあるか分からぬけれども、何の苦しみもなく自分の楽しみだけを、安樂だけを感じて生きるという道があつたわけです。ところが、梵天が釈迦のもとへやつて來た。「あなたが見据えたこの道で、あなたが救われても、さみしい話ではないですか。世の中には、あなたと同じような苦しみを持つてい

る人が山ほどいるのだから、そのためにここはひとつ立ち上がり、人のために、あなたの見つけた自分を変えるというこの道を、指導者として皆に教えてください」と頼んだわけです。そうすると、釈迦はそれを聞いて、なるほど、それならまあいかかということで、嫌々だけれども立ち上がり、初転法輪で五人の比丘にがつて、初転法輪で五人の比丘に教えを説くと。

梵天は仏教が起る前のバラモン教の最高神なのです。その梵天がわざわざ空から降りて来て、お釈迦様の前で手を合わすというこのストーリー、誰が考へたのか知りませんが、このストーリーは完全にバラモン教の上に立つたというふう、仏教のお釈迦様は梵天に出来ないことをやるんだということが見事に表現されています。

当時の教団では釈迦が有り難い御託宣を言つて、神様のような立場で弟子たちを引き連れていく、そんなのではありません。

先生が弟子を指導し、その弟子

が行われているということが仏教なって、自分の今までの在り方が先生になつてまた次の弟子へ。お釈迦様がやつた修行の道、自分を変えるというその方法、修行がずっとと継続して変わることなく続いて行くことが、仏教にとつて一番大事だということになります。

そして法があつても駄目で、その法を実際に受け取つて実践している、お釈迦様の後にずっと続く修行者そのものがいなければ、仏教は成り立たないでしょう。修行が行なつて、自分の今までの在り方が



自分の中の自我中心の、自己中心の世界観を自分で削り取つて、それを消すことを毎日やつていく。そのために坐禅する。これをやつている人がいなければ、仏教はそこにはない、ということになります。

お釈迦様の時代には文字がありませんでしたので、全部口伝です。そして実際の修行のやり方は、先生が弟子の一番良い資質を見抜いて、その資質に合ったコースを教えます。それはなぜかと言うと、例えば不淨觀という修行がある。憎しみの強い、怒りやすい人には不淨觀をさせてはいけません。女の身体は美しくいいな、と思つていたような世俗の人間が不淨觀をやると、「ああ、実はこんなに汚かったんだ」ということに

の基本ですから、その修行をする人たちの集まりはサンガですから、僧ということになつて、そして仏教は仏・法・僧という三つの定義になる。

自分の中の自我中心の、自己中心の世界観を自分で削り取つて、それを消すことを毎日やつていく。そのために坐禅する。これをやつている人がいなければ、仏教はそこにはない、ということになります。

お釈迦様の時代には文字がありませんでしたので、全部口伝です。そして実際の修行のやり方は、先生が弟子の一番良い資質を見抜いて、その資質に合ったコースを教えます。それはなぜかと言うと、例えば不淨觀という修行がある。憎しみの強い、怒りやすい人には不淨觀をさせてはいけません。女の身体は美しくいいな、と思つていたような世俗の人間が不淨觀をやると、「ああ、実はこんなに汚かったんだ」ということに

に怒りが湧いて来たりするので、それをさせてはいけないと。お釈迦様が中心になつて、お釈迦様と同じ生活スタイルをしたいという人たちが集まつて、ここに出家という新しい世界、仏教サンガというものができるわけです。

この仏教サンガの中を見てみますと、勿論全員が結婚をしません。もともと全員が世俗の人間です。一人一人が自分の思いを持つて、ある何かのきっかけで出家して教団へ入つてくるわけです。出家の動機は人によつてそれぞれ違うのだけれども、とにかく朝から晩まできちんと毎日、瞑想をする。他のことをやつしている余裕なんかない、全員修行しているのです。

仏というものを最初のよりどころとし、仏の教えを次々伝え、それを守つて修行をする人たちサンガがいるという、これが仏法僧の定義でしよう。これは万国共通ですから。チベットへ行こうがスリランカへ行こうが、仏教とは何ですかと聞かれたときに、必ず答える

「律」と「戒」

サンガに千人の人間、仕事しない者を引き連れて、釈迦はどうやってご飯を食べさせるのか。釈迦はこう考えました。毎日、朝になつたら村や町へ出かけて行って、余つたものや残つたものや腐つたものやいらなくなつたものを、何でもいいから下さいと言つて、貰つて歩こうではないか、と。こうして世間の余りものを一切強制せずに貰つて歩くというやり方で御飯を集め、鉢の中で一食分たまつたらそれを食べて、残りの時間はすべて修行をせよ、と仰る。御飯を貰えるまで回りまします。これは禁止です。修行が一番大事なのだから、修行優先だと。だから午後からは修行にだけ時間を使うと決めなくてはいけません

ただ一つの答えは「仏法僧」なのです。それ以外の答えはすべて誰も相手にしてくれません。「慈悲の心じや」、そんなのは駄目です。

から、ご飯のための仕事、托鉢は午前中で終わる。こうして一日一食午前中、というお坊さんの基本的な食生活が決まってくる訳なのです。

一般の人から御飯を貰うために一番大事なことは何かと言うと、一般の人が鉢に御飯を入れてあげたいと思うような人でなくては駄目なんです。

修行者が千人も居ると各々生まれや育ちが違うので、お釈迦様も苦労なさったと思います。お弟子さんたちに「立派にせえ」、「一般の人たちに物を貰っているのだから、後ろ指を指されるようなことをするんじやないぞ」と仰るのですが、そんな漠然としたことを言われて、一人一人みんな生まれも育ちも違うから、何が立派な行為で、何が駄目なのか分からないのでしょう? 行儀の悪い所で育つた子だって居るわけです。行儀の悪い所で育つた子が当たり前だと思つてやつていることは、一般の人からすると滅茶苦茶行儀が悪い

のです。ですから、教団の中に異なる生まれ育ちの千人の人みんなが毎朝托鉢に行けば、その内のたつた一人や一人、行儀悪い人がいて、その人がみんなから「ウワツ!」と思われるようなことをすると、修行者千人、全員の評判が落ちてしまうのです。

これは何となく、現代の宗門を考えて頂いたら分かりますね。新聞沙汰になるような和尚が出て来て、「臨済宗はそんな人ばかりではありません」と言いたいけれども、新聞を読んだ世間の人から見ると「へえ! こんな和尚ばかりか?」って思うわけです。

それと同じことが起こつて、お釈迦様は、どんな生まれ育ちの修行者であつても、世間から後ろ指を指されないような最低ラインは決めておかなければいけない、これだけは守れということを、細かく決めておかなければならない。朝起きて次は何をするという、教団で全ての日常の一つ一つの行動に関してラインを決めたわけで

す。したがつて、何百という規則ができました。これら全てをまとめたものが、「律」と呼ばれる仏教の規則集なのです。律には「してはいけない」という条文だけで、およそ二三〇条あります。その規定を本にすると、厚さにして六寸集を本にすると、厚さにして六寸全書と同じくらい。

この律は、仏教のサンガ、つまり集団が一般の人から御飯を貰つて暮らしていくという、その生活を守るために、お坊さんが後ろ指を指されないように、と作られたものです。組織を守つていくためです。組織が社会の中で潰されないように、皆から嫌悪感を持たれないように、悪意を持たれないようになります。組織が社会の中で潰されないように、皆から嫌悪感を持たれないよう、悪意を持たれないようにするために必要な規則です。

例えば、「出家者は人を殺してはならない」と書いてある。出家、出家と言いながら、煩惱を離れるとか言いながら、なんだ、人を殺すなんてとんでもない奴だということになつて、仏教僧団は大変な

の時代に全て出来たのではないにしても、コアな部分は多分お釈迦様が作られた。それが一〇〇年、二〇〇年の間に徐々に完成したのだと思うのですが、いずれにしても、いまから二五〇〇年ほど前にできた法律ですが、現在でも使われています。何処で使われているかというと、日本以外の全ての仏教国で使われているのです。日本以外のすべての仏教国は、その律に基づいて今も運営されているのです。ここが面白いところですね。戒というのはどういうことかと言ふと、人が心の中の煩惱を消すために必要な行い。一番有名な戒は何かと言うと、不殺生戒ですね。たゞ戒のほうを見ますと、人を殺したら仏教世界からの永久追放になる。他に別の規定があつて、他の生き物を故意に殺した場合は、反省して人に謝ればそれでよいと書いてある。つまり、戒は一括りで不殺生戒なのですが、律は人を殺した場合と、人以外の動物を殺した場合とで違う条文なのです。

この律というものは、お釈迦様

それはサンガの中での罰であつて、サンガから追い出されたその人が、警察に捕まつてどうなるかは仏教の知つたことではあります。今から、追い出されたお坊さんが、今度は警察に捕まつて死刑になるかもしれません、それは国の話であつて、仏教はそこまでは越権行為なのでやりません。

これを分かりやすく言えば、日本で言うと法律と道徳です。法律というのは、日本の国を維持してまとめていくために、安定した社会をつくるために必要なのが法律です。けれども、その法律と同時に、我々は自分自身の在り方として道徳というものを行う。

しかもこの律というものは完全法治主義なので、例外なしにあらゆる出家修行者に等しく適用されます。長老だから見逃されるとか、そんなことはひとつないので、どんな僧侶に対しても、全く同じ形で適用されるというのは、これがまたすごい。

それが一〇〇年、二〇〇年の間

はい。鉢に入れてくれたものを

三種淨肉

この律という法律書が、いまもそのまま使われている。有名なローマのローマ法というのもありますけれども、そんなものはたかが知れています。私は律は文化遺産、世界遺産だと言つてゐるのですけれども。

も運営されているのです。

この律という法律書が、いまもそのまま使われている。有名なローマのローマ法というのもありますけれども、そんなものはたかが知れています。私は律は文化遺産、世界遺産だと言つてゐるのですけれども。

肉を食べていました。

「三種淨肉」というのは、僧の私が原因で殺されたということを現行犯で見たか。三種類の疑いのある肉は不淨肉だから食べてはいけない、ということで、お釈迦様は極めて合理的に食生活を規定されておられます。

しかし、現在の仏教でいう精進料理というのはどうなんだという

話になりますが、お釈迦様の時代、古い時代の仏教には精進料理という話は全くありません。

「肉を食べるなど言いました」と書いてあります。

『大乗涅槃經』がきつかけとなつて、仏教の中に精進料理という概念が入つて来て、それが中国へ伝わると、更に儒教の精神が上乗せられて、「生まれ変わり、死に変わることがあるとしたら、自分が今食べている肉は先祖の肉かもしれない」という考

に徐々に完成したのだと思うのですが、いずれにしても、今から二五〇〇年ほど前にできた法律ですが、現在でも使われています。

インド人は牛肉を食べないと思つてゐるかも知れませんが、あれは後の時代になつて食べなくなつたのであつて、お釈迦様も牛も運営されているのです。

です。

インド人は牛肉を食べないと思つてゐるかも知れませんが、あれは後の時代になつて食べなくなつたのであつて、お釈迦様も牛も運営されているのです。

食べるのだから、その中には前日の残りのお肉とか魚が入つていて、汚れた食べ物を食べると身体の中から汚れて、来世に生まれた時に低いカーストに生まれてしまう、というような考え方。

だからインド人は、カーストの違う者同士が触れ合うことを非常に嫌がります。

肉食を禁ずるという考え方が仏教に入った時期は分かつています。『涅槃經』というお経があります。『涅槃經』には二種類あります。『涅槃經』には二種類あります。『阿含經』の『涅槃經』。中村元先生が翻訳した『ブッダ最後の旅』です。後世、『大乗涅槃經』が出て来て、この中で初めて、釈迦が



「肉かもしれないじゃないか」という話になつて、更に輪をかけて仏教世界に精進料理という考え方が強くなつていったわけです。

日本への仏教伝来

わが国の仏教伝来に一番の功労のあつた人は聖徳太子です。聖徳太子は日本という国に仏教を導入して、日本の国民を皆、仏の教えで苦しみから救いたいなんてことは、全く考えていません。当時は、中国文化圏の一員になるならば中國の仏教を取り入れるべきである

という勢力と倭の国として独立性を望み中国文化圏からの仏教を取り入れてはならんという勢力、この二つが戦つて蘇我氏が勝つ、仏教導入派が勝つわけです。その仏教導入派が勝つわけです。その仏教導入派の窓口が聖徳太子であつたわけです。ですから、聖徳太子は積極的に、中国文化圏の一員として日本を位置付けるために、仏教を導入しようということになつたわけです。

皆さんも御存知の授戒儀式といつて、一般の人がお坊さまになるための儀式がありますが、この授戒儀式は、律の中で

戒のために中国から僧侶を招聘するという事になりました。それが有名な鑑真和尚です。鑑真和尚も弟子が何百人もいたから十人くらいすぐになります。鑑真和尚自身が律の専門家ですから、日本にとつては願つてもない人物です。鑑真和尚は本当に偉い人で、鑑真和尚の心持ちは、辺境の地、倭の国に仏教を広めて、人々を仏の教えで救いたいというものでした。

鑑真さんは何度も渡航に失敗していただけれども、とうとう九州に上陸して、ついに鑑真和尚日本に上陸という話が、大和朝廷、奈良の都に伝わつた。そのときにお弟子さんも十四人来ました。その情勢がすぐには奈良の都に伝わつて、報がすぐに奈良の都に伝わつて、そうすると奈良の都では、これこの僧侶が承認しなければ授戒儀式は成り立たない」ということが書かれています。仏教伝来当時の日本には十人の僧侶が居なかつたのです。そこで、授

て、鑑真一行を迎えたのです。大和朝廷の思いは何かと言う

やリ方方が全部決まっておりまして、そのときに大事なことは、「十人の僧侶が承認しなければ授戒儀式は成り立たない」ということが書かれています。仏教伝来当時の日本には十人の僧侶が居なかつたのです。そこで、授

て、日本に仏教を広めることではあります。中国は立派な仏教国であることを、中国に示すことが一番の目的です。もつと言ふと国家公務員、上級国家公務員です。したがつて、そのお坊さんたちが自分たちでサンガをつくつて、毎朝托鉢をして回つて、ぼろぼろの格好で腐つたものを食べているなんて、そんなことは許されない。

ですから奈良のお坊さんたちちは皆、生活が国によつて保証されておりました。律令、律令の中に僧尼令、つまり男のお坊さん、女のお坊さんが従うべき法律を、別に國の法律の中につくつて、それで生活させていました。

したがつて、お坊さんたちが自分たちでサンガをつくつて、毎朝托鉢をして回つて、ぼろぼろの格好で腐つたものを食べているなんて、そんなことは許されない。朝起きてから寝るまですべて、国家のための行事に出でもらわないと困ります。天皇の行事、平癪、雨

が降らなければ雨が降りますように。中国から使節が来れば、その中国との間の対応、すべてお坊さんがやるわけです。

その生活の保証はすべて国がやりますから、上級国家公務員なので、なりたいという人がやつて来て、みんなそれをお坊さんにしていたら大変なことに毎日一〇〇人も二〇〇人もやつて来て、すべてお坊さんにして、すべてが上級国家公務員だつたら、国が全部養わなければならぬので、それはとんでもないことだというの数を一年に何人と決めました。ということは、そのお坊さんたがいうことは、國家としては絶対にいうことは、国家としては絶対に許せないわけなので、奈良時代の日本佛教は意図的に律を捨ててしまつたのです。

日本にやつて来た鑑真さんの思

いと大和朝廷の思いは完全にずれています。

一応、律を崇めますということで、「律宗」という宗派をつくりましたけれども、律宗という宗派があること自体が矛盾でしょ。仏教はすべて律宗に決まっています。

こうして奈良の佛教は、律のない国家公務員宗教として生み出されました。いまでも奈良のお寺のお坊さんたちの仕事は、佛教を広めることではなくて、奈良のお寺を修繕、維持することです。

この奈良の佛教が平安遷都で比叡山に来る。だから比叡山の佛教は、律なき佛教としてそこにあります。その比叡山に登ったさまざま鎌倉新佛教の教祖たちが山を下りてから、国民のための本当の意味での人々のための民衆佛教をして自分たちで修行をするなんて広めていきますが、もう既にその中には律はないのです。だから日本各宗派は一つたりとも、律に基づいて暮らしている宗派はありません。

ただ、これは律宗の人の名譽の

ために言つておきますが、律宗のお坊さんは、やはり律を大切にします。お坊さんは奈良から平安時代にお坊さんは奈良から平安時代にかけて、いろんな公共事業とか、そういう大きなお金の動くさまざまなプロジェクトの出納役になつていくのです。

かつたのです。律宗のお坊さんは安心だというのがあって、律宗のお坊さんは奈良から平安時代にかけて、いろんな公共事業とか、そういう大きなお金の動くさまざまなプロジェクトの出納役になつたのです。お坊さんは奈良から授戒ということになつてくるわけです。そうしますと、佛教が奈良から京都に移つた時代は、まだ奈良には年分度者という概念がまだ強かった。つまり、お坊さんは一年に何人しかなれないという数があつたわけです。それを奈良はすべて独占していたわけです。これは国のお金で養うわけだから、お坊さんの一存では決められない。坊さんの一存では決められない。言つてみれば政府が決めていくようなものです。

○質問 比叡山戒壇院で大乗戒を授ける根拠になつているのが、中国で編纂された梵網經と言われているのですけれども、その梵網經に基づいて禅宗のお寺院でもお授戒をされているのですが、先生はどうんなふうにお考えになりますか。

比叡山のひとたちの視線から見れば、奈良から伝わってきた佛教が佛教なのです。そしてその佛教の中には律というものが含まれてい

ないわけだから、別に悪意があるというものではなくて、自然の流れとして、佛教とはそういうものだとして取り上げる。

そうすると、その中でどうやらわれわれはお坊さんになれるか、授戒ということはどういうものだということになつてくるわけです。そうしますと、佛教が奈良から京都に移つた時代は、まだ奈良が力を持っております。そのときには年分度者という概念がまだ強かった。つまり、お坊さんは一年に何人しかなれないという数があつたわけです。それを奈良はすべて独占していたわけです。これは国のお金で養うわけだから、お坊さんの一存では決められない。言つてみれば政府が決めていくようなものです。

比叡山としては、これは不満です。われわれだつてこれから佛教の中心になると思っているのに、奈良のお坊さんたちが三十人分全部取つているわけですから。

それでけんかになる。年分度者

をめぐって、奈良と京都のお坊さんたちが武力衝突するわけですか。武器を持って戦ったわけです。奈良の仏教の京都支部が清水寺です。そうするとだんだん、渋々だけれども少し比叡山にもやろうかという話になつてくるけれども、それでも比叡山がいまから日本の中心になるためには、一年に五人や十人のお坊さんではとても足らないわけです。

そうすると、この年分度者をつくるための授戒儀式、これは鑑真さんが持つて来た、いわゆる本来の律で言つてある授戒儀式です。これを無視する必要が出て来るわけです。奈良が言つているような儀式だけが、お坊さんになる儀式ではない。本当はもつともつと心掛けで、われわれは授戒することができるんだと言つてしまえば、比叡山は比叡山で独自に授戒を行うことができるようになるわけです。そのときの根拠が梵網經なのです。

だから律によらなくても、授戒です。

できる儀式の形態として梵網經は持つてゐる。これによつて、あとはもう縛りなく、いくらでもお坊さんをつくることができるようになります。これが広まつて下へおりていきますから、鎌倉新仏教の多くがこの梵網經に基づく授戒を行うようになつてくる。禅宗もその一つということになるわけです。

けれどもこれはスリランカ、タイの人から見ると、なぜそれでお坊さんになつているのですかといふ話になる。

梵網經というのは、もともとは中国でつくられましたが、その大乗佛教の菩薩になるための儀式なのです。これはちょっと注意してほしいのは、もともとのお釈迦様の仏教では、お坊さんになるというのは、律の中で決められたのです。それが後の大乗佛教の時代になつても、大乗佛教というのをそのままに受け取つてしまつて、大乗台の律が抜かれてしまつて、大乗戒というもののだけが授戒儀式だけです。それが後の大乗佛教の時

も、同じ律に基づいて生活をしていました。だからインドでは、お坊さんは皆、授戒儀式は律の授戒をしていたわけです。

では、大乗佛教の戒というのは何なんだと。それはお坊さんになつたうえで、その人が小乗仏教の道ではなくて、大乗佛教の道を進みたいと願う場合には、さらに上乗せして大乗佛教の誓いを立てるので、これが梵網經の元になつてゐるのです。それが大乗戒といつもので、これが梵網經の元になつてゐるのです。だから大乗佛教のお坊さんといふのは、生活は律に基づいて、心掛けは大乗戒を上乗いくわけです。だから大乗佛教のお坊さんといふのは、生活は律に基づいて、心掛けは大乗戒を上乗していくのです。だんだんと大乗佛教の

お坊さんも、小乗佛教のお坊さんも、同じ律に基づいて生活をしていました。だから印度では、お坊さんは皆、授戒儀式は律の授戒をしていたわけです。

花園大学文学部仏教学科教授。文学博士。

一九五六年福井県生まれ。一九七九年、京都大学工学部工業化学科卒業。一九八二年、京都大学文学部哲学科仏教学専攻卒業。

一九八七年、京都大学大学院文学研究科博士課程満期退学。一九八八年九月、米国カリフォルニア大学バークレー校留学を経て、一九九〇年、花園大学文学部助教授、二〇〇二年、花園大学文学部教授（現在に至る）

専門は仏教哲学、古代インド仏教学、仏教史。

著書：『出家とはなにか』『インド仏教変遷論』（ともに大蔵出版）、『日々是修行』（ちくま新書）、『律』に学ぶ生き方の智慧』（新潮選書）

佐々木 閑氏 略歴
(ささき しずか)



寄稿

「仏縁と法縁」

浜松市 妙心寺派興福寺

大塚文俊

た点、哲学の道は「生と死」との解決であつたという点に影響を受けられ、又、方広寺開山無文元選禪師云く

皆様はじめまして。臨済宗青年僧の会の元会長を務めさせて頂きました妙心寺派浜松市興福寺の大塚文俊と申します。同寺に生まれ、昭和五十八年中学を卒業後、京都に進学し、十三年間関西に住し、現在は寺の住職と幼児教育の責任者として、地元の諸先輩方にご指導賜りながら二足の草鞋を履かせていただいております。

今回御縁を賜りました薪流会の皆様には、日頃より大変お世話になつております。

そのご縁にて今回文章を寄稿することとなりましたが、御見苦しい点ご容赦下さいませ。

さて、薪流会の皆様と臨済宗青年僧の会とは今から九年前平成二十三年六月八日から三日間、東日本大震災後の合同供養からの御縁と記憶しております。当時震災直後に、道路はガタガタの中、

海岸で合同の鎮魂法要を執り行い、そのご縁で色々な行事に拜請賜り、交流を深めることが出来たのだと塚文俊と申します。同寺に生まれ、昭和五十八年中学を卒業後、京都に進学し、十三年間関西に住し、現在は寺の住職と幼児教育の責任者として、地元の諸先輩方にご指導賜りながら二足の草鞋を履かせていただいております。

もとより大隠窟 大井際断老大師には色々と取り計らいを頂き、私が会長を務めておりました時に私は、方広寺様を会場に住職学という私どもの勉強会の会場に快くご利用ください、その節には勉強会会場に検査に来られたことを先日のように思い出します。

また、当会の百号記念誌寄稿依頼に方広寺様を訪れた際には、老大師の熱い思いから、一度断られたのですが、再度隠寮に出向き、お願いさせて頂き「生か死か」というテーマにて寄稿頂いたこともありました。

そのご縁にて今回文章を寄稿することとなりましたが、御見苦しい点ご容赦下さいませ。

さて、薪流会の皆様と臨済宗青年僧の会とは今から九年前平成二十三年六月八日から三日間、東日本大震災後の合同供養からの御縁と記憶しております。当時震災直後に、道路はガタガタの中、

「生は岫を出づる雲の如く」「死は空を行く月に似たり」という教えにて今まで指導してきましたが、然し現代の人々は死を忘れよ、生を楽しめと教えられている……したがって私の考え方と現代の考えとは全く違うもので、寄稿はお断りさせていただく旨のお話をいただきました。

そこで、老大師に、その思いを文章に託して今の僧侶に問いかけていただきたいとお願いをいたしましたところ、

碧巖録第五十五則「道吾漸源弔慰」を紙面にてご紹介いただき、弊会記念誌に御寄稿いただきました。

原稿を拝受に隠寮に上がった折には、にこやかに、また暖かく迎えてくださいました。

改めて弊会記念誌第百号の老大師のページを読み返しますと、老大師が導師をされる折や提唱の折、

ほんとうの「安心」は、ここにあります。



セコム
ホームセキュリティ

お寺のセキュリティもセコムにご用命ください。

セコム株式会社 TEL. 0120-025756 (24時間・年中無休)

信頼される安心を、社会へ。
SECOM

心の底から、身体中から絞り出す、
吹き飛ばされるような、拝聴する
度、涙が出るほど感動した香語や
祝語と同様に、ドスンと重い責任
のようないものを投げられたような
感じすらいたします。

このような私共の活動にも賛同
していただいております、薪流会、
大野会長様をはじめ事務局皆様方
には小祥忌にご案内賜り誠にあり
がとうございました。

私が居りました南禅寺僧堂の清
光軒老大師が学生時代、花大では
大井際断老大師が授業をしておら
れたそうです。その清光軒老大師
は常に「御縁ですね」と言ってく
ださいます。

老大師が大学時代に数冊の本を
右に置き講義されていた事、と私
が浜松の方広寺にて提唱を拝聴さ
せていただいた時の右側に置いた
数冊の本：時は違えど同じ老大師
から拝聴させていただいたと思いま
すと、大変感慨深い御縁を頂戴
致し、仏縁に感謝せずにほおられ
ません。

心の底から、身体中から絞り出す、
吹き飛ばされるような、拝聴する
度、涙が出るほど感動した香語や
祝語と同様に、ドスンと重い責任
のようないものを投げられたような
感じすらいたします。

臨済宗青年僧の会の参与として、
御礼申し上げます。

思い起こせば、昭和五十八年に
高校進学と同時に京都に行かせて
いた折には、毎朝、妙心寺
境内の中を早歩きをしながら、西
側に住せられた山田無文老大師、
東側に住せられた大井際断老大師
にお会いするのでは？と、緊張し
ながら登校したのを思い出しまし
た。

今思えば、同じ時間、同じ場所
に居させていただいた事に不思議
で、且つ仏縁頂戴いたしましたこ
とに感謝しかございません。

改めて老大師の書き記して下
さった文章に目を通させていただ
き、様々な御教授賜りました事、
感謝の念に堪えません。

改めてこのようない機会を賜りま
した事を、薪流会会長様はじめ事
務局皆様方に紙面をお借りして御
礼申し上げます。

前臨済宗青年僧の会 会長
大塚文俊 九拜

大塚文俊師

(おおつか ぶんしゅん)



昭和四十三年生まれ。

平成二年、同大学卒業
後、南禅僧堂で修行。
花園高校卒業後、花園大
学で学ぶ。

平成二年、同大学卒業
後、南禅僧堂で修行。

平成七年、佛教大学卒

業後、妙心寺派興福寺(浜
松市)副住職を経て

現在、興福寺住職、学

校法人興福寺学園理事長。

臨済宗青年僧の会会長
(平成二十三年～同二十五
年)、全日本佛教青年会理
事会長。

各大本山御用達

草木兵助法衣店

〒604-0024 京都市中京区衣棚通御池上る下妙覚寺町

京都(075) TEL 221-0934 (代表)

FAX 241-0773

寄稿 「起信会」のこと 小栗勝

小栗 勝

五年ほど前に臨済会発行「法光」に井筒俊彦さんの「東洋哲学覚書 意識の形而上学『大乗起信論』の哲学」という本の読書会を開いているという記事が載りました。以前、井筒俊彦さんの「意識と本質」という本を読んだことがあります。これは面白そう、浜松でもやってみよう、と呼び掛けたところ、少人数ながら有志が集まつてまいりました。

佛教に深く関わる書物ですから、毎月「維摩会」という座禅会を開いていらっしゃる龍泉寺御住職の薬師寺良晋師に加わっていただき開催の運びとなりました。

毎月一回のペースで読み始めましたが、哲学の本で内容も難しいため少しづつ読み進めていきました。自分自身の理解を深めるとともにメンバーの参考にもなるようにと毎回レジュメを作成して配布しています。通常は数ページのレジュメで難渋することしばしばです。

井筒さんの「意識の形而上学」を読み終えて、続けて何か読みましてうということになり、薬師寺師の薦めにより古賀英彦先生の「訳注 大乗起信論」を読むことになりました。この本は各段ごとにもの漢文と古賀先生による訓読と和訳が並記され重要な事柄について古賀先生の説明がつけられています。

井筒さんが、『起信論』は至る所で双面的・背反的・二岐分離的に展開すると述べていますが、原著に当たるとまさにそのとおり、古賀先生の見事な説明に助けられる部分も多いのですが、難解な箇所も多々あります。言葉如だとすれば、書を離れお茶を

そこで、平川彰さんや高崎直道さんの見解を参考にしたり、薬師寺師に関連文献の解題をしていたり、古賀先生の別の論文を参考にしたり、時にはシステム理論や複雑性理論などの現代諸科学の知見に基づく解釈をしてみたり、そのうえで互いに思う所を述べ合い意外な視点もあるものなどと互いに驚きながら理解の幅を広げつつ進めています。

読書会そのものもちろん楽しいのですが、読み合わせの前に抹茶を頂いたり食事を楽しんだりすることもあり、これも心寛ぐひと時です。浜松を離れて全員で京都に赴き東福寺の山内を拝見させて頂いたこともあります。

その折、ご案内くださる東福寺

塔頭の善慧院ご住職に会のことをどう伝えようか、そもそも名前がないのでは伝えにくい、どうしよう、では「起信会」という名にしようということになりました。

読書会での読み合わせや議論を依言真如だとすれば、書を離れお茶を

臨濟宗各派
御荘嚴袈裟衣調進所

加藤法衣店

〒453-0047 名古屋市中村区元中村町1丁目72番地
電話 052 (471) 1496
FAX 052 (471) 1681

精進料理・慶事・仏事御膳料理

御料理・仕出し 紀文

岐阜県山県市青波262-1
本店(代)TEL.(0581)52-1090
FAX.(0581)52-3020
岐阜サービスコール ☎ 0120-371605



飲み食事を共にし街に出るのは離言
真如のなせる業かも知れません。

『起信論』に特有の概念として「薰習」があります。相互の影響を語るとき「力」という言葉をよく使います。「影響力」という言葉がそのよい例で暗黙の裡に「力」をもとに相互関係を理解しようとしています。ところが『起信論』では「薰習」です。現在の言葉で言えば、「コミュニケーション」であり「場」で展開される相互関係を示唆しています。このような眼で眺めると『起信論』の言う「薰習」がなんと現代的な内容を持つていてことかとこれも読書会の中で気づかされ驚かされたことの一つです。

高名な細胞生物学者で生化学者でありノーベル賞受賞者でもあるクリスチャン・ド・デュードがその著書「生命の

霧」の中で、人間を含め生命は宇宙の必然として存在していると述べています。そこに描かれている、宇宙を貫く真理が人間にも及びそれが人間の智慧を生み人間の智慧が宇宙を貫く真理を明らかにするという構図は、不思議なほど『起信論』の描き出しが世界と対応しているように思われてなりません。こんなことに気づかされたことも読書会を通してのうれしい驚きのひとつです。

いま世界は新型コロナウイルスによる感染の恐怖の中で閉塞状況に陥っています。従来型のコミュニケーションをとることがままなりません。「起信会」もやむを得ず一時休止となっていますが、人類の智慧がこの困難を克服し、新たな世界が生まれ、「起信会」もまた再開できるものと確信しています。生命四十億年の歴史から見れば人の一生は一瞬とも一刹那とも言えないので短いですが、その短い中身をおいて「起信会」という名の読書会を通して豊かな永遠を感じ観じることができます。

浜松市出身
一九四八年一月八日生まれ
一橋大学経済学部卒業

小栗 勝氏

(おぐり まさる)



愛知大学大学院卒業(経営学修士)

浜松短期大学(教授) オフィス
オートメーション論 情報科学概論
論、情報科学概論担当
浜松学院大学(教授) 経営情報
浜松学院大学(教授) 情報処理
計学) 静岡文化芸術大学(情報処
理)で教育にあたる。

浜松学院大学図書館長
名城大学(情報処理)、静岡大学(統
合)、静岡文化芸術大学(情報処
理)で教育にあたる。

磐田市図書館建設計画策定委員
会委員
浜松市立図書館建設委員会委員長
静岡県西部高等教育ネットワーク
会議委員

浜松商工会議所「ワープロコンテスト
ト in 浜松」審査委員長
浜松市情報化推進懇談会委員長
浜松市社会教育委員会委員長
などを歴任

現在、エンケイ財團奨学生選考委員
長 浜松学院大学名誉教授

御法衣・莊嚴具調達

臨濟宗各本山御用達

大黒屋
神田法衣店



株式会社

〒603-8207 京都市北区紫竹牛若町29番地2
電話 京都 (075) 493-3507番(代)
FAX (075) 493-5098番



チャリス村の棚田

これまでの厳しい国内情勢のおかげか、外出制限などは手慣れたもので、徹底的に行われています。それは山岳地帯にも及び、各村間の移動も徹底的に遮断されています。自分の身は自分で守る、ということが基本となっている国ゆえで

二〇二〇年コロナウイルスの影響はネパールにも及んでいます。二月の時点ですぐに空港での入国制限を開始し、三月十二日の時点でビザの発給を取りやめ、早々に首都カトマンズでの厳しいロックダウンを開始しました。そ

のため、山岳地帯の出身者は逃げるよう山岳地帯に戻り、マオリストの活動によつて逃れる

前の状態の村の状況に戻っています。五月現在、ネパール国内の感染者数は正確な数は掴みきれていないものの、三百人程度。それもインドから逃れてきたインド人と接する機会のある国境での感染者だそうです。



チャリス村・シェルトウン村の合同の会合

ネパール・チャリス村の 現況報告 グラン・ビル・バハド

しょう。

外出制限がかかる前の今年一月のシェルトウン村、チャリス村は穏やかな時間が流れています。薪流会支援で建設した村の聖地で農閑期ということもあり、とても

穏やかな時間が流れています。薪流会支援で建設した村の聖地で農閑期とい

真心で創る



ねもと店
〒507-0078

寺院莊嚴具・仏像・仏具・仏壇
位牌調製 製造販売
妙心寺派寺院御用達

株式
会社

竹内佛具店

岐阜県多治見市高根町3-75-2(旧248号沿い)
TEL <0572> 27-2204
FAX <0572> 27-2204

ショールーム
岐阜県多治見市広小路3-28
TEL <0572> 23-8746
FAX <0572> 24-1008

ある水道からは蕩々と水が流れ、ご支援を頂いた村民の家屋、薪流ハウスは、二〇一五年以来少しづつ手を加えて、震災前の穏やかさがやっと戻ってきておりました。シェルトウン村では、薪流会の支援で建設した学校が呼び水となり、日本政府初の遠隔地支援が行われ、他三つの教室が建設されました。これまで見捨てられてきた地域に、少しずつ関心が集まり始め、また建設等のプロジェクトを



チャリス村の中心地

通して村民たちが団結して地域の発展を話し合う機会も増えてきました。別の村からの見学者も絶えませんし、現地の先生方からは、立派な教室があることは通学する子供たちの意欲も高めてくれているとの言葉もいただきました。

医療体制が全くない中で、村ではまた、コロナという厳しい風が吹き始めていますが、首都や出稼ぎに行つた国から人々も帰つてきており、村は賑やかさを取り戻しているそうです。また、新しい教室が建設されていたら、家屋が

かつては、何もない上に地震では壊滅的なダメージを受け、村人も失意のどん底に居たと言わざるを得ません。しかし、今振り返つてみると、文字通り一筋の光をあたえ、人々の心を満たしてくれたのは、薪流会様の支援と長期にわたり寄り添つて下さった心だと確信しています。この厳しい状況を乗り越え、いつか、薪流会のみなさんをお迎えする日が来ることを、村民は一同、心から待ち望んでいます。



シェルトウン村の学校の授業風景

禪の妙相

大本山妙心寺・臨済宗各御本山御用達

御袈裟法衣



莊嚴仏具調進司

後藤新助法衣仏具店

妙心寺門前

〒616-8041 京都市右京区花園寺ノ前町30番地
電話(代表) 075-462-3915/FAX 075-462-3616
URL <http://www.rinzai.jp>

駐車場完備

随想 読書つれづれ

薬師寺 良晋

読書三余

十年ほど前のこと。縁あって、花園大学時代の恩師 西村惠信先生の自坊へお伺いした際、御著書を一冊頂戴した。先生は、その本の表紙見返しに「謹呈 薬師寺良晋様 湖東三余居 惠信」と署名して下さった。「三余居は僕の書齋の名前なんや。三余、つてナンや知ってるか? 冬は歳の余り、夜は一日の余り、雨は時の余り、と言うそな。後は自分で調べてナ」と先生は仰つてヤリと笑われた。

自坊の蔵書を駆使して調べると、出典は『魏志』の王肅傳註だった。

「三余」とは、中国の三国時代、魏の大司農(現代日本の財務大臣)であつた董遇が、その弟子に教えた読書法のことである。董遇は、常に弟子達に「読書百遍、義自から見わる」と教えたのだが、ある弟子云く、「私は毎日忙しくて、書物を百回も読む暇がありません」と。すると、董遇は「暇がないことはないであろう。

三余に読書せよ。」と。董遇によれば、三余とは、「冬は歳の余、夜は日の余、陰雨は時の余なり。」であった。

冬は一年の余り、夜は一日の余り、雨降りは時の余り。余暇を無駄にしてはならない、寸暇を惜しんで読書せよ。ということが「三余」の意味するところなのである。

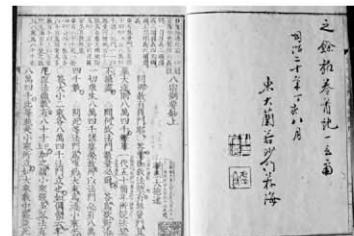
三余の董遇よりも更に手厳しい。生来、読書を怠けがちな私には、実際に耳が痛いものだ。

雑僧要訓

そういうえば暘山禪師編『雑僧要訓』にも読書についての心得を示す一節がある。貝葉書院版から引用すると、次の通り。

八宗綱要と大乗起信論

『雑僧要訓』は「内外ノ書」眼ヲ付ケベシ」と教えるが、「内外ノ書」の「内」の書とは仏教書である。さて、雑僧に最適な仏教書といえば、『八宗綱要』であろうか。本書は律宗の僧、凝然が仏教教理の大綱とインド・中国・日本へと伝播した経過を概説し、当時の日本の八宗(俱含宗・成



可輕ノ句ヲ胸
中ニ張リツケテ
出精スベシ。
寸暇を惜しん

で仏典あるいは外典(仏教以外の書)を読み、人と雑談する暇

があつたら通俗の書(現代ならば小説や隨筆であろう)を読む方がまだマシだ、いくつ忙しい寺でも少しの暇もない筈はなかろう、というのである。

三余の董遇よりも更に手厳しい。生来、読書を怠けがちな私には、実に耳が痛いものだ。

フリーダイヤル 0120-86-2779

仏壇・位牌・寺院用具・仏教美術品

ぬしや仏具店

浜松市浜北区貴布祢504-7 www.nushiya.net

ぬしや工房

お仏壇・ご本尊・仏具・家具調度品の塗替え、修復
お見積もり無料 ご一報ください

華嚴宗・真言宗の歴史と教理を説く仏教入門書である。

さて、『岩波仏教辞典』（第二版）は『大乗起信論』（以下、起信論）について「大乗仏教の中心思想を理論と実践の面から手際よく要約」しているといい。古来、中国や日本において盛んに読まれたとする。明治のはじめ、東京帝国大学の印度哲学科において原坦山が『大乗起信論』を講じたことからも、本書が仏教入門書として尊重されたことをうかがい知ることができる。

筆者が起信論に触れたのは四十一年近く以前になるが、唯識と同じ述語が起信論に頻出するので、辞書を引いてみると唯識の述語説明の後に必ず、「起信論では○○とされる」とあって、起信論独自の述語に馴染んでしまうと『成唯識論』など唯識論書の文脈把握を間違う、と痛感したものだ。縁あって、この三年ほど起信論を精読しているのだが、素朴な疑問が生じてきた。はたして起信論の所説は「大乗仏教の中思想」と言えるであろうか、と。

但舎と唯識

禅門で誦誦する開甘露門の冒頭

そんな矢先、大竹晋氏の『大乗起信論成立問題の研究』（大藏出版）が発表され、起信論は漢文仏教典籍からのパツチワーケであることを示し、起信論には正統な仏教思想の誤解にもとづく異説が随所に見られること、撰述者は北朝の仏教者であり、馬鳴や真諦へ仮託された経緯を指摘された。大竹氏の著書は、漢文大藏經や敦煌文献を駆使して起信論所説の典拠を探り、更に梵文仏典を指摘し、長年にわたるインド撰述説・中国撰述説論争に終止符を打った画期的な業績である。大竹氏の説に従えば、起信論が「仏教の入門書」として相応しいかどうかは甚だ疑問である。

さもあらばあれ、起信論は中国・日本の仏教思想に多大な影響を与えたのは事実であるし、西田幾多郎や鈴木大拙の思想解明には避けて通れぬ文献であることに変わりはない。「若人欲了知、三世一切仏、應觀法界性、一切唯心造」と、実叉難陀訳『大方廣仏華嚴經』の偈文が引用されている。過去・現在・未来の一切の仏を明らかに知りたいと望むなら、法界の本質をよく観察せよ、一切は心が造りだしたものである、という。「一切は心が造りだしたもの」とは如何なる事か。これを明らかにしたい、というのが筆者の昨今の関心事であり、そのためには必須となるのは唯識の書物である。古來、「唯識三年、但舎八年」といい、唯識を学ぶならば並行して『但舎論』も学ばねば理解出来ぬ、とは学生時代から喧しく聞かされたものだ。唯識教学の集大成たる『成唯識論』を中心として読むとしても、筆者の読解力からすれば、しっかりと理解するまであと何年掛かるか分からぬが、令和二年のコロナウィルス禍は骨山に寓居する私に三余以上の読書の機会を与えてくれているのだ。これを無駄にしてはならないであろう。

御法衣・莊嚴具・稚児貸衣裳

△山田八郎法衣店

〒460-0011 名古屋市中区大須三丁目39-31
電話 (052) 241-1817 FAX (052) 241-1834

前総裁大隱窟老大師 大祥忌 並びに総会報告

◆期日／令和二年二月十九日
◆場所／京都市右京区
大本山妙心寺塔頭東海庵

薪流会では二月十九日、京

都市右京区大本山妙心寺塔頭の東海庵で令和元年度総会を開催いたしました。総会に先立ち、妙心僧堂岫雲軒老大師

導師のもと元方広寺派管長雲窟老大師五十年遠忌を、引き続き弊会名誉会長國師導師により前総裁大隱窟老大師の大祥忌を顧問 菩提寺先住職閑古室老大師並びに梅林僧堂悠江軒老大師ほか僧俗二十二名の参列にて厳修致しました。



満場一致でご賛同いただきました。
総会後、京都市左京区のエクシブ京都 八瀬離宮に移動して懇親会を開催。

参加者一同、和やかな雰囲気のまま閉会となりました。



総合式場 ブライトホール

北ブライトホール [堀川紫明] 山科ブライトホール [五条外環]
中央ブライトホール [五条東山] 伏見ブライトホール [丹波橋新堀川]
南ブライトホール [油小路八条] 向島宇治ブライトホール [宇治槇島]
西ブライトホール [五条西大路] 大津ブライトホール [大津駅南]

家族葬専用 別邸

別邸 向島宇治 [宇治槇島] 別邸 大津 [大津駅南]

お葬式の「？」に
答えます



答える葬儀社

公益社

本社／京都市中京区烏丸通六角上ル

TEL 0120-004-200 公益社 京都 検索



奥老師50年遠忌と前総裁3回忌

〔薪流会〕
臨濟宗新流会は19日、名譽会長の横江令澄・妙心寺派塔頭東海庵大師の50年遠忌と前総裁3回忌を、京都市右京区の大本山妙心寺塔頭東海庵で盛大に開催した。大師は元広寺派管長の50年遠忌「写眞」と前総裁の「大井際断・前方広寺派管長の大祥忌」を兼ねておこなわれた。奥老師は大井老師の師に当たる。方丈に入れる前に、遺影を安置し、まず総裁が「50年遠忌・3回忌をお勤めし、お一人の老師方へ贈呈する」と挨拶。顧問の東海庵住職が「奥老師を勤めて奥老師のも満足しておられると思ふ」と答えた。20年も東日本大震災遭難者らに支援金を送る。大玄・梅林僧堂師家が「面目嚴然鐵操翁・嘲居文室辨雌雄/酬恩讀誦薪報恩底は大切なこと。」開き、会報を発行する。

令和2年2月26日 中外日報

大井老大師をしのぶ 薪流会



同会は、自然災害の被害を受けた遺族や物故者へ支援物資の寄付やボランティアなどの社会貢献に取り組む。敏峰雲軒老大師は挨拶で「皆さんにおいていただけたことは非常に嬉しい。2人の老師は、托鉢などで受けいると思う」と述べた。

令和2年2月29日 文化時報



寺院仏像仏具 製造 修理 販売



有限会社 天真堂中央社寺工藝社

〒 451-0031 愛知県名古屋市西区城西1丁目 10-21
TEL 052-532-0607
FAX 052-532-0608

<http://tensindo.co.jp>
E-mail info@tensindo.co.jp

令和元年度 托鉢義援金
(順不同 敬称略)

平林寺	三万円 江楓室老大師 埼玉県新座市(妙)
臨濟寺	三万円 無底窟老大師 静岡県静岡市(妙)
実相寺	巨島泰雄 静岡県浜松市(方)
福寿院	荻須智善 京都府京都市(妙)
好徳寺	毛塚順康 静岡県浜松市(方)
林貞寺	大野浩宗 愛知県名古屋市(妙)
光正寺	平林正諄 静岡県浜松市(方)
大仙寺	二宮慶州 岐阜県加茂郡(妙)
東雲寺	佐藤堪堂 愛知県名古屋市(妙)
善勝寺	明見弘道 埼玉県鴻巣市(妙)
禅台寺	田中義峰 岐阜県可児市(妙)
文永寺	野呂全法 愛知県江南市(妙)
清昌寺	市原宏洲 岐阜県多治見市(妙)
天福寺	鬼頭孝道 岐阜県土岐市(妙)
雲龍寺	保子令謙 岐阜県可児市(妙)
雄香寺	西村大定 長崎県平戸市(妙)
元昌寺	上田宗演 岐阜県多治見市(妙)
玉林院	林 宏樹 長野県木曽郡(妙)
興福寺	大塚文俊 静岡県浜松市(妙)
金嶺寺	石井康州 愛知県一宮市(妙)
蓮光寺	佐久間眞澄 静岡県沼津市(妙)
太清寺	田口宗純 愛知県春日井市(妙)
一万円	

五千円

春城院	植木昭道 静岡県賀茂郡(妙)
大儀寺	苅谷典昌 岐阜県可児市(妙)
宝樹院	加藤泰裕 千葉県佐倉市(妙)
久林寺	大住拙道 静岡県駿東郡(妙)
菊水寺	鈴木光雄 静岡県駿東郡(妙)
渡邊貞正	愛知県名古屋市(妙)
徳蓮院	井村道弘 三重県名張市(曹洞宗)
圓通寺	吉田和広 静岡県浜松市(方)
瑞應寺	伊藤寧浩 岐阜県羽島郡(妙)
妙音寺	鏡 優雅 埼玉県行田市(妙)
安寧寺	紹格 静岡県浜松市(妙)
誓願寺	鉢 尚範 静岡県静岡市(妙)
大安寺	林 成道 岐阜県各務ヶ原市(妙)
崇徳寺	渡井達應 群馬県安中市(妙)
長永寺	永田明徳 静岡県御前崎市(妙)
宗栄寺	日坂宜祥 愛知県犬山市(妙)
高源寺	菅井一磨 茨城県取手市(妙)
徳運寺	今治祥峻 愛知県新城市(方)
二福寺	岐阜県多治見市(南)
宝満寺	三谷正友 和歌山県田辺市(妙)
宗清寺	金井孝雄 埼玉県児玉郡(妙)
宜雲寺	西村寛城 東京都江東区(妙)
圓通寺	千葉県佐倉市(妙)
興禪寺	水越淨円 千葉県佐倉市(妙)
宝昌寺	石川元信 栃木県宇都宮市(妙)
妙雲寺	道家明宗 岐阜県瑞浪市(妙)
秘在寺	加藤明徹 栃木県那須塩原市(妙)
武山清堂	小島法久 岐阜県中津川市(妙)
五千円	

三千円

大池寺	清水寿晴 滋賀県甲賀市(妙)
清蓼院	大崎景山 愛知県一宮市(妙)
觀音寺	伊東祖弘 岐阜県美濃加茂市(妙)
桃林寺	岩田俊道 愛知県豊橋市(妙)
隣松寺	徳山宗達 岐阜県不破郡(妙)
常善寺	武田董裕 岐阜県加茂郡(妙)
喜福寺	伊東宗泰 栃木県足利市(妙)
龍泉院	川瀬智之 静岡県浜松市(方)
龍翔寺	堤 普照 三重県多気郡(妙)
西福寺	大雅清光 岐阜県可児市(妙)
富春院	原田宗涛 静岡県浜松市(方)
石雲寺	伊藤隆法 愛知県新城市(方)
天澤院	天安宗道 岐阜県岐阜市(妙)
居士	板谷茂樹 岡山県倉敷市
三千円	

一千円

瑠璃光寺	川瀬春水 岐阜県安八郡(妙)
長福寺	國枝義昌 岐阜県揖斐郡(妙)
福泉寺	宇佐美豊道 茨城県鉾田市(妙)
龍月院	青山宣宥 岐阜県美濃加茂市(妙)
一千円	

托鉢報告

令和元年十月十六日 半僧坊浜松別院 正福寺様を会所にお借りして、浜松市中心部を托鉢致しました。九時半参集(会員・役員・縁者総勢五名)十時より托鉢出向、帰山。

この度の托鉢に対し各方面から多くなるご援助、ご協力を頂き厚く御礼申し上げます。



令和1年度会計決算報告

自平成31年1月1日～至令和1年12月31日

1. 一般会計

収入 2,456,798円
 支出 2,456,798円
 残高 0円

収入

(単位・円)

項目	予算	決算	比較	備考	前年度決算額
賛助金	400,000	340,000	▲60,000	正副総裁・顧問・参与	360,000
会費	350,000	245,000	▲105,000	役員・会員	275,000
事業収入	350,000	21,877	▲328,123	色紙収益	210,000
広告収入	400,000	630,000	230,000	会報広告掲載料	290,000
雑収入	10,000	108,917	98,917	預金利息・全日仏より活動支援金	100,097
活動基金より	0	0	0		1,000,000
繰越金	1,111,004	1,111,004	0		1,593,330
合計	2,621,004	2,456,798	▲164,206		3,828,427

支出

(単位・円)

項目	予算	決算	比較	備考	前年度決算額
本部	50,000	50,000	0	活動費	50,000
浜松支部	50,000	50,000	0	活動費	50,000
事務費	200,000	128,216	▲71,784	要覧作成・事務用品他	173,286
通信費	150,000	149,625	▲375	郵送料・宅配便他	139,637
会議費	200,000	96,160	▲103,840	会所費他	310,271
文化部	100,000	231,985	131,985	研修会費	0
編集部	700,000	673,322	▲26,678	会報編集・発行	810,702
托鉢部	100,000	3,868	▲96,132	托鉢	79,752
慶弔費	20,000	0	▲20,000		60,000
交際費	100,000	0	▲100,000		100,000
25周年記念事業	0	0	0		943,775
繰越金	951,004	1,073,622	122,618	次年度へ繰越	1,111,004
合計	2,621,004	2,456,798	▲164,206		3,828,427

2. 活動基金

2,680,000円

(単位:円)

収入	
前年度繰越金	2,580,000
托鉢部より	100,000
合計	2,680,000

3. 浜松支部決算報告

収入 127,100円
 支出 127,100円
 残高 0円

自 平成31年1月1日
至 令和1年12月31日

(単位:円)

収入	支出
一般会計より	50,000
繰越金	77,100
合計	127,100
	会議費 10,000
	交際費 10,000
	次年度へ繰越 107,100
	合計 127,100

会計監査報告

平成31年1月1日より令和1年12月31日の会計について、帳簿等証拠書類を照合致しましたところ、厳正且つ正確に処理されていますことを、認めましたのでここに報告申し上げます。

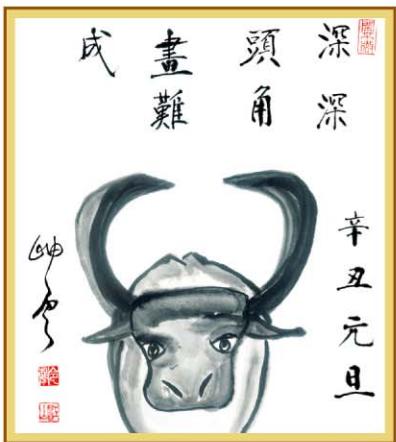
令和2年2月1日

監事 毛塚順康



監事 戸崎知則





令和3年 お正月色紙見本

お正月用色紙御案内

岫雲軒老大師揮毫色紙

(工芸印刷)

解説書・たとう紙付(折込み済)ご好評頂いております総裁猊下揮毫の正月用色紙を本年も発売致します。

一枚 三三〇円[送料別・税込]

(但し一般は四三〇円)

※寺院の方は五〇枚単位にて御願い致します。

(但し在宅の方は十枚単位より受付致します。)

申込み先 (左記の二カ寺にて受け付けます)
大雄寺

〒509-1030
岐阜県加茂郡川辺町下麻生一九九八
TEL○五七四一五三一五二二〇
FAX○五七四一五三一六九三三

徳生寺

〒434-1004

静岡県浜松市浜北区平口五四八

TEL○五三一五八七一一〇〇五

FAX○五三一五八七一一〇〇九

申込期日 令和2年十月二十日〆切
発送 十月末日頃

編集後記

『薪流』第二十九号をお届け致します／今年のコロナウィルス感染症の嵐は未だ終息の気配がありませんが、本号も総裁岫雲軒老大師はじめ佐々木閑先生ほか玉稿執筆頂きました各位には誠に有り難く、篤く御礼申し上げます／感染症拡大は世界中の人々の健康を脅かし、経済・文化へ及ぼした多大な影響は数知れません。

外出自粛要請の中、オーヴェルの『一九八四年』を再読しました。本作は歴史の改竄を仕事とする主人公が登場する近未来小説ですが、彼の暮らす世の中たるや一党独裁の全主義社会。そこで描かれる重苦しい閉塞感は、コロナウィルス下のわが国の有り様を彷彿とさせます。

閑話休題、一人一人がどうあるべきか、何をなすべきかが問われているよう思う今日この頃であります。

(良晋記)

薪流会のホームページができました。
ぜひご覧ください。
<http://www.shinryukai.jp/>